

「お葬式の意義とは」

臨濟宗大徳寺派 竺園寺 渡邊恭山

序論

4月15日の朝日新聞に「コロナ 弔いの場一変」という記事が載りました。新型コロナウイルスの影響下、十分に別離の悲しみ苦しみが癒やされぬまま、火葬が済まされてしまうというのです。

「お葬式」は、別離の悲しみ苦しみを癒す働きのあるものです。

『葬式に迷う日本人』で一条真也氏は「一連の行事が、遺族にあきらめと決別をもたらしてくれません。愛する者を喪った遺族の心は不安定に揺れ動いています。

そこに儀礼というしつかりした形のあるものを押し当てるのが、「不安」をも癒します。」と言います。

「お葬式」とは、別離の悲しみを乗り越え、平常心に還る節目となるのです。

本論

現代の仏教そして「お葬式」を取り巻く情勢は、厳しくなっています。

現状の「お葬式」の主体をなしているのは、家族です。

簡素化の中でも、「家族葬」という名称があるほどです。

それでも、『葬式に迷う日本人』の中で、島田裕巳氏は、「高度資本主義社会は、家族を求めない社会でもありません。」と言います。

ユヴァル・ノア・ハラリ氏は、『サピエンス全史』で国家と市場が、家族とコミュニティを崩壊させると言います。血縁と地縁がこわされつつあるということなのです。

さらに『ホモデウス』では、資本主義が進化し、科学が進歩すると、経済的価値や政治的価値、さらには芸術的価値さえ持たない人々、「無用者階級」が生み出されると言うのです。

家族どころではありません。私たちは、ばらばらの個人とされ、さらに、社会的価値をも無くされて、「無用者」という「階級」にひとくくりにされてしまうというのです。

そして、『葬式に迷う日本人』で島田氏は「もう人を葬り、弔う必要はなくなっている。遺体を処理すればそれでいい。そんな時代が訪れている。」とも言われています。

しかし、故人を「無用者」として経済的価値を始めたとした社会的価値を無くされたままに、遺体の処理だけで葬られてよいわけがありません。

故人の人生における悲しみ苦しみ、故人の人生といるいろいろの場面で縁を持った縁者の悲しみ苦しみを癒すことが「お葬式」の働きです。

故人と縁者の苦しみ悲しみは、個々に別々のままにしているよいのでしょうか。

現代は、「個人の尊厳」をやかましく言いますが、『般若心経入門』の中で、松原泰道師は、心の表面の自我の尊厳ではなく、自我より深いところにある真実の人間性の尊厳が本当の人間の尊厳だとおっしゃいます。

自我の底にある「個人の尊厳」とは何でしょう。

『佛心』で朝比奈宗源師は、「私どもは、仏心の中に生まれ、仏心の中に生き、仏心の中に息を引きとるのであります。仏心からはずれていきること、仏心のほかに出ることも、できないのであります。たとえば、私どもは仏心という広い心の海に浮かぶ泡のようなもの

で、私どもが生まれたからといって仏心の海水が一滴ふえるのでも、死んだからといって、仏心の海水が一滴へるのでもないのです。」とおっしゃいます。

自我の奥に通底する「仏心」が、「個人の尊厳」の正体であります。

「仏心」とはまさに自らの中にある「ほとけ」です。

『般若心経入門』で松原泰道師は、『ほとけ』とは「真実の人間性」のこと』だとおっしゃいます。

仏教の「お葬式」の中で、故人は、戒を授かり、戒を授かった証明としての「戒名」を授かることで、自らの中の「ほとけ」を依りどころとして一個の人間として、「真実の人間性」の尊厳を証明するのです。

私たちは、現代社会において、社会的価値を無くされ、「無用者階級」に落とされても、自らの中の「ほとけ」を依りどころとすることによって、本当の個人の尊厳を証明することができるのです。

松原泰道師は、『般若心経入門』で、「他人の悲しみや苦しみに共感しないかぎり、本当の個人の尊厳はありえないでしょう。」ともおっしゃいます。

「お葬式」の中で、「ほとけ」を依りどころにすることによって、私たちは、悲しみ苦しみを故人と共感していく気づきを得られるということになります。

「お葬式」の授戒によって、個々の悲しみ苦しみから縁者と故人の人生を共にした経験の分の悲しみ苦しみの共感が生まれるという意味になるのです。

「お葬式」の中で、悲しみ苦しみの共感とは、「供養」になります。

『盂蘭盆経を読む』で松原泰道師は、「供養」を、『供養』は供給と資養の二字を約した熟語だとおっしゃいます。亡き人にお供えをするのが「供」。

亡き人へお給仕の功德を喜ばれて、亡き人がその喜びを生きている私たちに回向されるのが資養、「たすけやしなう」です。資養は、亡き人が私たちの心を資けて仏心を養ってくださいとおっしゃいます。

「供養」は、縁者のお供えする心と故人のそれに応えようとする回向される心です。

そして、『盂蘭盆経を読む』で松原泰道師は、「供養」の心とは、「報恩感謝の念い」、「ありがとう」の心に通じると教えて下さいます。

結論

「お葬式」に参列する縁者の別離の悲しみは、故人の人生の苦しみ悲しみへの共感になり、さらに共に「ありがとう」という感謝の心での「供養」の回向になります。

縁者の故人の人生への感謝の心は、故人から学んだ人生の経験を自らの人生で活かしていくでしょう。

「お葬式」は、故人の人生の苦しみ悲しみから学び、それを参列者の人生に活かしていただけ働きもあるのです。

いわば、故人の人生を参列者の人生に受け継いでいく働きになるのです。

「お葬式」は、苦しみ悲しみから感謝の喜びに変えていく節目の第一歩になる儀式であり、故人の人生を参列する縁者に引き継いでいく節目の儀式になるのです。

参考文献

- 『朝日新聞4月15日』「コロナ 弔いの場一変」
『葬式に迷う日本人』三五館発行 著者島田裕巳・一条真也
『サピエンス全史下』ユヴァル・ノア・ハラリ著
『ホモ・デウス下』ユヴァル・ノア・ハラリ著
『般若心経入門』祥伝社新書 松原泰道著
『佛心』春秋社 朝比奈宗源著
『孟蘭盆経を読む』佼成出版社 松原泰道著